

令和5年度

新時代の英語教育推進事業

～英語を用いたコミュニケーション能力の育成に向けて～

事業の概要

目指す子ども像

英語で自分の考えや気持ちを精一杯伝え合う子ども

小学校:自分のことや身近なことについて、英語を使って伝え合う児童
 中学校:日常的・社会的な話題について、聞いたことや読んだことを基に自分の感じたことやその理由などを伝え合う生徒

目指す授業の姿

聞く・読む・話す・書くことの4技能が十分に高まり、もっと英語を使いたいと思える授業の実現

小学校:十分なインプットを基に、英語でのやり取りを大切に授業
 中学校:既習表現を活用して、生徒自身が使用するべき表現を思考・判断する授業

対 応 英語を用いたコミュニケーション能力の育成に向けた、教師の指導力向上

- 1 求められている英語教育を実践していく実践リーダーの育成
- 2 具体的な取組みを基にした実践や英語指導に関する情報の県全体への発信と共有

「英語教育実践リーダー」の育成

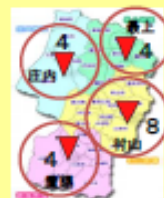
- 1 年間を通じた実践研究により、各年度 20 名（小 10、中 10）の教員の指導力を向上させ、各地区でモデルとなる実践を示す。

事業概要

- (1) 計画・検証・改善を充実させる研究協議会（年3回）
- (2) 外部講師を招聘した授業改善の充実（年2回）
- (3) 英検 IBA と県作成評価問題を基にした指導改善
※当該中学校で実施
- (4) 非常勤講師の活用による授業補助や教材開発支援
※当該小学校に配置
- (5) 当該市町村教育委員会への訪問サポート（年3回）

○英語教育実践リーダー（▽）

- 人間力があり、周囲の信頼が厚い者
- 授業改善の意欲に満ち、リーダーとして活躍が期待される者
- 校内外で継続的に英語教育推進に努める者



※各地区にチーム設置

県内への指導実践の発信・共有（クラウドサービスの活用）

- 2 地区毎のチームで指導実践（ノウハウ等）を各地区や県内に随時発信して、情報共有することにより、県内英語教員全体の指導力を向上させる。

事業概要

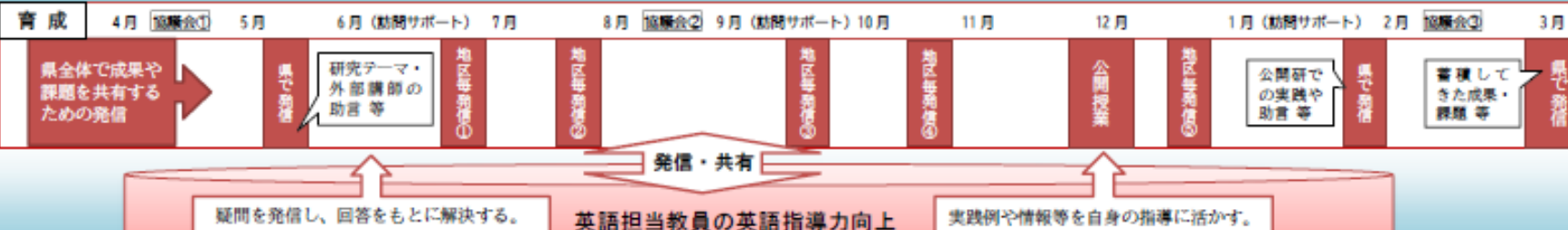
- (1) 公開授業研究会での実践普及（11月～12月）
チームメンバーが事前検証から事後検証まで関わりながら、各地区の代表が授業を公開
- (2) チームから ICT 機器で実践事例発信（年5回）
地区毎にチームを組み、持ち回りで実践経過を発信
- (3) 県で情報発信（年3回）
講師助言や公開研情報、実践事例等を発信

○クラウドサービス

【Google Workspace for Education】

- 動画等のデジタル教材や参考資料を英語担当教員同士がオンライン上で共有して有効活用
- 実践リーダー同士のコミュニケーションを活性化し、より高いレベルの授業を実施
- チーム内での打ち合わせや校種別の情報交換等をオンライン上で実施

容量無制限



※年間スケジュール（予定）

小中各10名の英語教育実践リーダーが、

「指導力向上」と

「指導実践の発信」

を図ります。

【村山】

- 鈴木 康太郎 先生(天童市立長岡小)
- 渡邊 咲 先生(寒河江市立南部小)
- 窪田 崇司 先生(中山町立豊田小)
- 井上 将吾 先生(大石田町立大石田北小)
- 佐原 詩乃 先生(山形市立第二中)
- 安部 瑠莉香 先生(山形市立第五中)
- 佐竹 優 先生(上山市立宮川中)
- 渋江 純子 先生(天童市立第三中)

【最上】

- 荒川 優芽 先生 (最上町立大堀小)
- 後藤 優華 先生 (鮭川村立鮭川小)
- 柿崎 祐希 先生 (新庄市立明倫学園)
- 古木 千秋 先生 (戸沢村立戸沢学園)

【置賜】

- 高橋 利幸 先生 (川西町立小松小)
- 衣袋 理佳 先生 (飯豊町立第二小)
- 飯澤 喜 先生 (白鷹町立白鷹中)
- 岡村 美和 先生 (南陽市立沖郷中)

【庄内】

- 児玉 里緒 先生 (鶴岡市立朝暘第一小)
- 齋藤 諒祐 先生 (庄内町立余目第一小)
- 阿部 安那 先生 (鶴岡市立鶴岡第三中)
- 佐々木 恵巳 先生 (酒田市立第二中)

指導・助言いただく外部講師の先生方

- 佐藤 博晴 先生 (山形大学)
- 小泉 有紀子 先生 (山形大学)
- 金森 強 先生 (文教大学)
- 阿野 幸一 先生 (文教大学)
- 酒井 英樹 先生 (信州大学)
- 太田 洋 先生 (東京家政大学)
- 阿部フォード 恵子 先生 (CALAグローバル)
- 青柳 敦子 先生 (山形県立長井高校)
- 吉澤 孝幸 先生 (秋田県立秋田南高校中等部)

育成を目指す資質・能力を明確にした単元構成 [共通]

(計画例) **CAN-DOリスト等を活用し**、付けたい力を明確にしてゴールから単元構成を考える。

言語活動を通じた指導の充実 [共通]

(計画例) **「やってみたい」と思える**言語活動を設定し、**目的を常に意識**しながら言語活動に取り組む。

十分なインプットを基にした授業 [小]

(計画例) **気付きが生まれるようなインプット**を行い、徐々にまとまりのある文へとスモール・ステップでインプット量を増やす。

思考・判断・表現することを繰り返す授業 [中]

(計画例) **表現の型にとらわれず、目的・場面・状況等に応じて**既習事項を活用できるような言語活動を行う。

第1回研究協議会で授業づくりの視点を確認

R3・4英語教育実践リーダーが
いただいた指導・助言をもとに

<視点1>

単元等で育成を目指す資質・能力を明確にする

<視点2>

言語活動を通した指導を行う

<視点3>

指導と評価の一体化を図る

単元（本時）の目標

単元（本時）を通して、どんな力を付けたいのかを常に意識しながら授業を行うことが大切です。付けたい力に即して、「今日はどんなことができればよいのか」を明確にしましょう。



目指す児童の姿を具体的に描く

単元の言語活動における具体的な児童の発話例を、「A評価の例」「B評価の例」として事前に書いてみるとよいでしょう。

→ 評価基準が明確になります。



目的、場面、状況を明確に

例えば、「自己紹介をする」というのは目的ではなく「場面」です。「自己紹介で、自分や相手の新たな一面を知り合う」など、「目的」のある言語活動が生徒の主体性を高めることにつながります。



生徒が思考・判断する工夫

使う表現を提示するのではなく、生徒に考えさせるようにします。例えば、「I would like ○○.」を使うように示すのではなく、「注文する」という場面を確認します。その中で、どのような表現を使えばよいかを生徒が考えることが大切です。



話すこと[やり取り]の言語活動では

担任やALTがやり取りのモデルを示すことが大切です。黒板にやり取りの型を書いて示している実践も見られますが、児童の自然なやり取りを妨げる可能性があることに留意しなければなりません。



教師と生徒のやり取り

教師の発話の中に、生徒とのinteractionを増やしていきましょう。

(例) 前時の復習を一方向的な説明でなく、生徒に教科書を開かせ、生徒に問いかけて答えさせながら確認する。 → 即興で答える力を育む。



中間指導の焦点化

本時で「英語の正確さ」と「表現内容」のどちらに指導の焦点を当てるのかを明確にしたうえで、焦点に沿った中間指導の声かけを行い、児童に考えさせて気付かせるのがよいでしょう。



言語活動を通じた指導

- 「活動 → 指導 → 活動」の指導過程を充実させましょう。
- 活動前に発話の型や言語材料の示しすぎを控えましょう。
- 練習と言語活動を区別して、バランスよく行いましょう。

指導と評価の一体化に向けて

☆指導したことを評価しましょう。

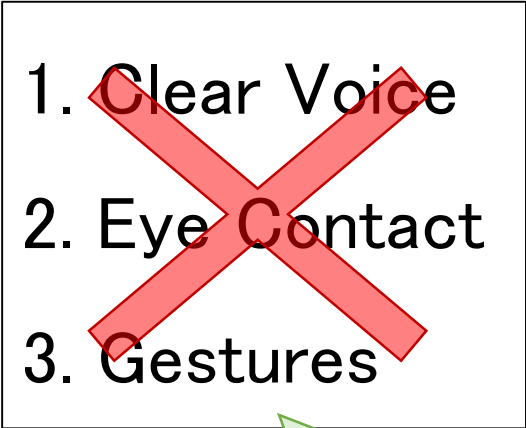
(評価することを指導する)


☆評価できる状態まで繰り返し指導しましょう。

(「C」の状態の子を「B」にするための支援)



授業づくりのKeywords

- 
1. ~~Clear Voice~~
 2. ~~Eye Contact~~
 3. ~~Gestures~~

- 
1. Authenticity (真正性)
...身近で本物の活動を！
 2. Personalization (個人化)
...自分のことを語る場を！
 3. Creativity (創造性)
...型でなく、自由度の余地を！

コミュニケーションを円滑にするために大切な視点ですが、評価のポイントとなるのは、「話すこと」「書くこと」の領域では、「使用する英語の正確さ」と「表現内容の適切さ」です。

年間を通して英語教育実践リーダーによる実践等を発信し、県内の先生方と共有していきます。

授業改善に向けて、県HPや県内小中学校等限定公開のGoogle サイトで発信資料をぜひご覧ください。

各地区の英語教育実践リーダーが公開授業研究会を行います。事前に案内しますので、一緒にスキルアップしていきましょう！

Googleサイトのアクセス方法等は、今後各学校にお知らせします。

<英語教育推進のページはこちら(県HP)>

英語教育の推進 山形県

